ことぶき「なか」だより
No.177
2016.10.

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel.（045）671-1109
振替　00200 － 1 － 47369
E-Mail : naka@church.jp　http://church.jp/naka/
発行者　石倉夕子　（題字　松橋 順）

宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

セクシュアル・ハラスメントを中心とした ハラスメントを考える

三・一教会牧師　平良　愛香　さん

お話中の平良愛香さん

○沖縄のご出身で、現在は三・一教会の主任牧師を務める平良愛香さん。ご自身が男性同性愛者であることを表明して、セクシュアリティ、平和、人権などの問題に積極的に発言されています。今回、ハラスメントについてお話を伺いました。

ハラスメントという言葉をあちこちで聞くようになりました。最初に出てきたのがセクシュアルハラスメント（以後セクハラと略記）です。お酒を注がされる、身体を触られる、まだ結婚しないのかと聞かれるなど、主に女性に対する性的な言動で、本人が嫌がっている時にセクハラという言葉が使われるようになりました。日本では一九九九年施行の「改正男女雇用機会均等法」で企業のセクハラに初めて言及しました。実は悪いと知ってセクハラをする人は少ないです。徐々に言葉が浸透して、セクハラだと訴えることで阻止できるようになってきました。

ハラスメントを生み出す条件

すべてのハラスメントには、力関係があります。全く対等な関係ではハラスメントになりません。嫌だと言えない、あるいは嫌だと言っても聞いてもらえない関係、例えば会社の上司と部下、学校の先生と生徒などは上下関係がはっきりしていてハラスメントになりやすいです。

教会もハラスメントが非常に起きやすい場所です。牧師は偉く、権威的になりがちです。牧師が何かした時に、「私は不快だ、圧力と感じて怖かった」と言えるかどうか。大抵は言えずにハラスメントとして残ります。

デリカシーのない教会

教会は家族みたいなアットホームな群れであるとよく言われます。距離が近く、遠慮なくずかずかと土足で踏み込んでくる、しんどい共同体でもあります。例えば「まだ結婚しないのか」と言う質問です。会社は学び始めているので、プライバシーに踏み込んだ質問だとブレーキがかかります。しかし、教会には学びがありません。私自身も男性同性愛者なので、女性と結婚するつもりは毛頭ないのですが、事情を知らない人からどうして結婚しなのかとよく聞かれます。「結婚は？」「彼女いないの？」「お子さんは？」と続きます。

ある夫婦は子どもができませんでした。いちいち言う必要はないのに、「お子さんはまだ？」と聞かれます。年配の女性が、こうしたら子どもができやすいとアドバイスする場面に居合わせたことがあります。すごくデリカシーがないと思いました。男（女）はこうあるべきというジェンダーの押しつけや、夫婦は子どもがいなければ完璧でないなど、性に関わる考え方の中に、善意でも人を傷つけることがあります。セクハラを単純に、「嫌がっている相手にする悪い行為」と捉えると真実を見誤ります。不用意な行動や言葉で、思わぬ苦しみを相手に与えることも多いのです。

対価型セクハラと環境型セクハラ

セクハラには大きく分けて「対価型」と「環境型」の2つのタイプがあります。対価型セクハラは、力関係が明らかで、断ったり、批判したりすると、不利益をこうむる場合です。環境型セクハラは、全体的に不快な場所になっている、例えばヌードポスターが貼ってあるなどの場合です。お酒

を注がされたり飲みに誘われる場合では、対価型と環境型の両方があるでしょう。

対価型セクハラの例として、牧師が握手を求めてきた時、断れない状況があります。握手や接触を好まない人もいます。握手やハグの行為そのものが問題ではなく、嫌がっている人が嫌だと言える状況かどうかが問題です。本当に良い関係なら断れますが、拒んだら牧師の善意を拒絶したと取られるかもしれないと思ったら言えません。反対に、信徒から牧師、あるいは生徒から教師へのハラスメントもあり、誰にも相談できず悩んでいる牧師や教師は多いです。力関係は絶対的ではなく、強者と弱者が入れ替わることもあります。

環境型セクハラの例として、異性愛主義の強い教会を考えてみましょう。徹底した異性愛主義が教会内にうずまいていると、何気ない会話も同性愛者には本当に居心地が悪いです。男女二分主義も根強く、週報棚や座席、出席者名簿などで男女を分けています。故意にいじめよう、不利な状況に追いやろうとしているわけではなくても、トランスジェンダーをはじめとした性的少数者の人達を苦しめることがあります。

性的な内容の話がセクハラではない

厚生労働省のパンフレットでセクハラの例として「性的な内容の発言」があります。性的な内容の話そのものがセクハラではなく、話せる環境なら何も問題はありません。聞きたくない、話したくないと思う人が嫌だと言える環境かどうかが重要です。

私は農村伝道神学校で性差別の講義を受け持ち、性暴力の被害や性産業の話もします。中には話を聞くのに耐えられないという学生がいます。授業では語る側と聞く側が対等ではない関係になりやすいので、最初に「ハラスメントにならないように注意して話すけれど、しんどくなったら退席してもいいです」と伝えます。性的な話は、人格の深い部分に関わるからこそ、相手を傷つけやすいと実感しています。

性暴力の被害者は自分に落ち度があった、自分にも非があると思っている人がとても多いです。また世間ではレイプされた女性を傷物のように扱う考え方がありますが、それは間違いです。講義では必ず「被害者は悪くない。性被害で人間の価値は全く損なわれない」と話しています。リアクションペーパーでその言葉を待っていたという学生がいます。

傷ついている人ほどよく笑う

厚生労働省は労災の認定基準を緩和するように求めた新基準の中で、セクハラの被害者が苦しみから逃れるために、その場だけ加害者の誘いに乗ったり受け入れたりすること、被害を受けてすぐ相談しないこともあるが、それがセクハラを否定する理由にならないとしています。その場では喜んでいるように見えても、あるいは困っているように見えなくても、実はセクハラでショックを受けていることはよくあります。差別や、傷つくようなことをされた時に、意外とヘラヘラ笑っている人は多いです。二年前に都議会でセクハラやじ問題がありました。「早く結婚しろ」「産めないのか」などと言われた女性議員はその場で笑ってしまいました。見ていて痛々しかったです。ああいう発言の時、笑わないと次へ進めません。でも多くの男性は、彼女がそこで笑ったことで、一緒にその揶揄に乗った、そんなに傷ついていないと見ます。ハラスメントに傷ついている人ほどよく笑うと感じています。教会も、別にみなさん無理にニコニコしなくても、仲良くしなくてもいいと思います。教会はみんな仲がいい場所じゃないといけないと思うと、我慢する人が出てきます。

セクハラの主観と客観

あるMTF（男性から女性になった人）が職場で女性トイレを使うようになりました。すると元男性だったことを知る女性社員が「耐えられない、セクハラだ」と訴えました。これはセクハラで片付けていいでしょうか。では女性になった人はどこのトイレに行けばよいでしょうか。より苦しむのはどちらでしょうか。ある事が不快だからと、その人の発言がすべて肯定されるとは限らず、見極めが必要なこともあると思います。

厚生労働省のパンフレットでは「労働者の主観を重視しつつも、（中略）一定の客観性が必要。被害を受けたのが女性の場合は、平均的な女性の感じ方を基準とし…」とあります。平均的というと、敏感な人は感じ過ぎと片付けられてしまう可能性もあって難しいですが、一番大事なのは、上下関係があるところをいかに解消していくか、その人の苦痛を受け止め、一緒にどうしたらいいかを話していくことだと思います。

信仰にかかわるハラスメント

教会はどうしても上下関係が生まれやすく、パワーハラスメントやモラルハラスメントがよく起こります。「あなたは信仰が足りない」「あなたの聖書の読み方はおかしい」と牧師や教会生活の長い人に言われたら、多くの信徒は自分が間違っていると罪悪感を感じます。同性愛者である私は、牧師の言葉や権威のある注解書の言葉と合わないのはあなたがおかしいからだと言われ続けてきました。

「あなたは知らないかもしれないけれど、うちの教会ではね…」という発言も、今までやってきたやり方に新しい人を従わせようと抑え込むならハラスメントです。

教会の中で、その空間の中で大切にされていないと感じた時、ハラスメントが起きている可能性が高いです。「私は今しんどい、つらい」と言える関係をどこまで作っていけるか、その時、ハラスメントを克服できるのではないかと思っています。

（まとめ　牧田祐子）

使信

「ヤコブの梯子」

石倉夕子

ヤコブはベエル・シェバを立ってハランへ向かった。とある場所に来たとき、日が沈んだので、そこで一夜を過ごすことにした。ヤコブはその場所にあった石を一つ取って枕にして、その場所に横たわった。すると、彼は夢を見た。先端が天まで達する階段が地に向かって伸びており、しかも、神の御使いたちがそれを上ったり下ったりしていた。見よ、主が傍らに立って言われた。「わたしは、あなたの父祖アブラハムの神、イサクの神、主である。あなたが今横たわっているこの土地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は大地の砂粒のように多くなり、西へ、東へ、北へ、南へと広がっていくであろう。地上の氏族はすべて、あなたとあなたの子孫によって祝福に入る。見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを果たすまで決して見捨てない。」ヤコブは眠りから覚めて言った。「まことに主がこの場所におられるのに、わたしは知らなかった。」そして、恐れおののいて言った。「ここは、なんと畏れ多い場所だろう。これはまさしく神の家である。そうだ、ここは天の門だ。」ヤコブは次の朝早く起きて、枕にしていた石を取り、それを記念碑として立て、先端に油を注いで、その場所をベテル（神の家）と名付けた。ちなみに、その町の名はかつてルズと呼ばれていた。ヤコブはまた、誓願を立てて言った。「神がわたしと共におられ、わたしが歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主がわたしの神となられるなら、わたしが記念碑として立てたこの石を神の家とし、すべて、あなたがわたしに与えられるものの十分の一をささげます。」

（創世記二八章一〇節　二二節）

梯子は律法・道徳？

今日のテキストは、ヤコブの梯子というお話として有名なお話です。私がこのお話を最初に知ったのは、教会に通い始める前、中学生の時でした。オルコットの若草物語をご存じだと思いますが、その中で天国への階段と言うお話として出て来るのです。このヤコブの梯子を下から上へ伸びるイメージでとらえると（実際にそういう翻訳も複数あります）梯子を、律法、道徳と理解し、善行を積み重ねて天に至ることがヤコブの梯子を昇ることだというのです。従軍牧師として不在の父に代わり、母親が娘達にこのお話をするのです。神の御使いたちがそれを上ったり、下ったりしていたというところは、神の送られた御使いたちが梯子の上り下りを手助けしてくれるというです。しかし神学校に入りこの箇所を読んだとき、そんなことは一言も書いていないということが解ったのです。

梯子ではなく階段

実際に中身を見て行きたいと思います。このお話は本来二七章四一～四五節に続きます。ヤコブは母の命令（二七：四三）に従い、ベールシェバを出発してハランに向かいます。ベールシェバからハランまではほぼ一二五キロだといわれています。その途上での体験が今日のお話です。そして旧約聖書における最初の夢の物語でもあります。そしてとても細かいことなのですが梯子ではなく階段なのです。イメージとしてバベルの塔を思ってもらえると一番近いと思います。バビロニアの塔神殿です。

私達の所に下りてきてくださる神

本来この一〇節から一二節は一五節につながるものだったろうといわれています。そして本来一九節で一つの物語としては整った形になっています。この物語は、ベテルという聖所の成立を説明する物語に、神の共存の約束（私はあなたと共にいる）が付け加えられ、さらに最終的に、そこにイスラエルの歴史に関する約束（一三b～一四節：民族への祝福）とさらに二〇節～二二節（神に対する誓願と十分の一の捧げ物）の祭儀的習慣が付け加えられ、全体としてはイスラエルにお

えーとねえ

大人用の鉄棒にぶら下がりたい美宇ちゃん

みう「ママ、鉄棒にぶら下げて」

ママ「いいよ、何をするの・・」

みう「身長伸びるように頑張る」

（目指すはスラリ八頭身？　郭美宇　四歳）

ける神礼拝の歴史が語られているのです。ベテルの聖所の成立の物語は元々イスラエルとは関係なく語り伝えられていたのだと思います。

この物語は本来、さすらう個人が神と出会ったというお話です。それが一六節～一七節です。別にベテルでなくてもよかったのです。そしてそれはまさに「見よ、私はあなたと共にいる」という神との出会いだったのです。

最終的にこのテキストは捕因期以後に編集されました。それはベテルの聖所がヤコブに遡るといこと、そうであるならば二〇節から二二節の祭儀的習慣もまたヤコブに遡らなければならないという前提があっての編集です。そして全ての誓願は聖所においてのみ成立するということを前提として編集されていったのです。それが後に神殿礼拝というものになっていくのです。神殿礼拝のその後の腐敗は皆さんご存じの通りです。

本来このテキストはヤハウェ資料だといわれています。ヤハウェ資料の特徴はきわめてシンプルで直接的な神理解だといわれています。それは今日のテキストの一二節にも現れています。「先端が天に達する階段が、地に向かって伸びており」です。私の元に神が下りてきてくれるのです。それが祭司資料の編集により「神殿」が象徴するように、そして若草物語が象徴するようにそのままの私であっては神とは出会えないということになるのです。「見よ、私はあなたと共にいる」。この言葉を発した神はヤコブを守り、エサウをも生きる道へと導いた神であること、どんな人間であれ決して見捨てない神だということを今日のテキストの最下層から読み取りたいと思います。

まど

◇八月二〇日（土）～二一日（日）恒例のなか伝キャンプが、上郷森の家（横浜市民ふれあいの宿）にて行われた。今年のテーマは「ハラスメントを考える」と「なか伝の今後を考える」でした。ハラスメントに関しては、この通信を御覧ください。「なか伝の今後を考える」では、みんなで伝道所がどのように支えられているかを考える良い時となりました。そしてそれは、ハラスメントの起こらない、また起こさない教会であるためにも、必要な時間でした。

◇地震、豪雨、台風・・。自然の猛威の前に、あまりにも無力な人間。それでも神様は、私たちにそこから立ち上がる力を与えて下さると信じたい。そのための知恵を私たちに与えてください。そう祈らずにはいられない。（石）

風景

私は離婚歴があり、子どもがいません。「クリスチャンも離婚するの？」「お子さんは？　不妊治療は受けてないの？」と言葉をかけられると、その場ではヘラヘラと笑ってかわし、長くもやもやと引きずりました。当時これがハラスメントだとは思いませんでした。今回の学びの過程で、ジェンダー規範の押しつけというセクシュアルハラスメントや、信仰にまつわるモラルハラスメントについても理解を深めることができました。自分さえ我慢すればいい・・・と考えて声を上げなかったことで、第二、第三の被害者を生み出すこともあるハラスメント。誰かの言動を不快に感じたら、「やめて」「嫌だ」と言うことの大切さを今、あらためて痛感しています。

なか伝には毎週さまざまな方が訪れます。価値観を押し付けることはなく、多様性を認める居心地の良い場所だと私は思います。ですが、なか伝は強烈な主張を持った集団なので、中には合わない人、意見が違う人もいるでしょう。なか伝の礼拝では、聖書を批判的に読み解き、神様の声を正しく理解しようと努めています。牧師をさん付けにして、上下ではない横の関係を目指しています。牧師の渾身の説教後に、皆で容赦なく疑問を投げかける時間があります。色々な仕掛けでハラスメントが起こりにくい環境を作っているようです。なか伝ではノンクリスチャンの方がのびのびと礼拝に通い、できる奉仕をしておられる姿も素敵だと思います。引き続き、より良い環境づくりのために皆さんで一緒に取り組んでまいりましょう。

（牧田祐子）

お知らせ

渡辺英俊牧師による連続講座を予定しております。詳しい日程と内容に関しては決定次第、皆様にお知らせ致します。